

# 広島で育む平和の心



持参した折り鶴を手にはボランティアガイドの説明を聞く掛川市の中学生＝5日午後、広島市中区の平和記念公園

## 県内自治体

# 小中学生派遣広がる

被爆地・広島に小中学生を派遣する県内自治体が増えている。6日の平和記念式典には掛川など6市町が参列する。原爆の悲惨さを学び、核兵器廃絶を願う被爆者の思いに触れる平和教育が広がりを見せている。

71回目の原爆の日を翌日に控えた5日、掛川市の派遣団が広島市に到着した。参加した中学生6人はいずれも初訪問。ボランティアガイドの説明を受けながら原爆ドームや原爆の子の像を見学し、市民らが寄せた約3千羽の折り鶴をささげた。掛川市は今年から派遣事業を始めた。平和学習に力を入れてきたが、戦後70年が過ぎ、戦争体験を後世につなぐことが重要（団長の浅井正人副市長）と判断した。市立北中3

年の服部れみさん（14）は「二度と悲劇を繰り返してはならない。広島でしか感じられない平和を学びたい」と話した。今年掛川のほか、三島、藤枝、袋井、森、磐田の6市町が計85人の小中学生を式典に派遣する。広島と長崎へ交互に中学生を送る焼津市を除けば過去最多となる見通しだ。2014年度は森町、戦後70年の15年度には袋井市が派遣を始めた。1995年度から継続する三島市は、150人以上の中学生を派遣している。多くの自治体が地元に戻って発表の場を設け、現地で感じた戦争

の悲惨さを伝えていく。式典とは別の時期に派遣する自治体もある。裾野市は7月27、29日に中学生10人を初めて広島に送った。被爆体験を聞いた市立須山中2年の飯塚厚さん（14）は「戦争と核兵器の恐ろしさを改めて感じた。平和の大切さをクラスメートに伝えた」と語った。受け入れる広島の人たちも「若い世代に平和の尊さを感じてほしい」と歓迎する。広島市にある比治山大現代文化学部の森川敦子准教授（教育学）は「被爆の実相を学び、地元を持ち帰ることは重要。同時に同世代の人たちとの交流にも力を入れてほしい」と話す。（社会部・森田憲吾）

の悲惨さを伝えていく。式典とは別の時期に派遣する自治体もある。裾野市は7月27、29日に中学生10人を初めて広島に送った。被爆体験を聞いた市立須山中2年の飯塚厚さん（14）は「戦争と核兵器の恐ろしさを改めて感じた。平和の大切さをクラスメートに伝えた」と語った。受け入れる広島の人たちも「若い世代に平和の尊さを感じてほしい」と歓迎する。広島市にある比治山大現代文化学部の森川敦子准教授（教育学）は「被爆の実相を学び、地元を持ち帰ることは重要。同時に同世代の人たちとの交流にも力を入れてほしい」と話す。（社会部・森田憲吾）